

広島文教大学附属高等学校だより【保護者の皆様へ】 2

2025 年 5 月 15 日

校長 岡 利道

部活動 点描 ～茶道部～

広島文教大学附属高等学校（以下「本校」）の部活動は、共通の興味や関心をもつ生徒をもって組織し、次の二つのことを目的とします。

- a 自主的・積極的な態度を身に付け、個性と資質を伸ばします。
- b 指導者・上級生との人間関係を深める中で連帯意識を高め、集団の一員としてふさわしい態度や能力を身に付けます。

本校が追い求める「育心育人」の教育理念と大いに重なります。

この度は、文化系の中から、茶道部さんを取り上げます。現時点では、顧問教員 2 名（そのうち外部からの先生 1 名）、部員 8 名（3 年 1 名・2 年 5 名・1 年 2 名）です。

部員の皆さんは、顧問の先生方からのご指導により、日々精進しています。中でも、前年度から稽古を積んできた生徒二人は、5 月 5 日（月曜・子供の日）に広島市中区袋町にある頼山陽史跡資料館茶室で開催された「端午の節句茶会」でお点前を披露し、好評を得ました。



規模も大きく、由緒ある茶会ですので、生徒たちは緊張したと思いますが、日ごろの稽古の成果を発揮し、文字通り学園訓にある「謙虚で優雅な」姿を見せてくれました。

新入部員さんも徐々に裏千家茶道に慣れ、伝統を受け継いでくれるに違いありません。今後も地域の行事に合わせた茶会に出向いたり、学校行事（文教祭）で茶会を開催したりするなど、活躍が大いに期待されます。

外国の方が日本に来て一番感動するのが「日本のおもてなしの心」だと言われます。ま

た、社会人として人間的な幅や厚みを身につけ、豊かな心を持った教養ある人であることも求められるでしょう。茶道の基本精神は、「和敬清寂」、すなわち「和やかな心、敬い合う心、清らかな心、動じない心」であると思います。本校の礼法の授業に限らず、クラブ活動として茶道に励むことも、上記のような人となる第一歩ではないでしょうか。

心に太陽を 唇に歌を

もう一つのトピックに移ります。校長として挨拶する中で、何度かこの「心に太陽を唇に歌を」のフレーズを使いました。また、これからも使っていくつもりです。

このフレーズを私がなぜ好んでいるのか、ということについて触れます。

タイトル「心に太陽を持て」という詩をどこかで読んだぞという方がいらっしゃるかもしれません。1989年のこと、小説家の山本有三（編）『心に太陽を持て』という本が出版され、その中で同名の「心に太陽を持て」が紹介されたのです。山本有三がドイツの詩人・ツェーザル・フライシュレンの作品を、彼なりに訳して、多少書き換えもしているとされています。次のとおりです。

心に太陽を持て。
あらしが ふこうと、
ふぶきが こようと、
天には黒くも、
地には争いが絶えなかりと、
いつも、心に太陽を持て。
くちびるに歌を持て、
軽く、ほがらかに。
自分のつとめ、
自分のくらしに、
よしや苦勞が絶えなかりと、
いつも、くちびるに歌を持て。
苦しんでいる人、
なやんでいる人には、
こう、はげましてやろう。
「勇氣を失うな。
くちびるに歌を持て。
心に太陽を持て。」

いかがですか。私などは、この詩のメッセージ性の強さ・深さに一発でノックアウトされ、好きになってしまいました。この影響もあって、私は何度が生徒たちの前で、「心に太陽を 唇に歌を ポケットにユーモアを」「何事にも レッツ・エンジョイ！ レッツ・トライ！」という言葉を投稿にかけています（下線部が直接の影響を受けたところです）。

その「心に太陽を」を、早くも生徒たちが体現してくれました。それは5月9日のことです。午後から本校の体育館で、新テニスコートの竣工式・オープンセレモニーが行われました。

天気がよければ、新テニスコートに集い、青空の下で弾けるような歓声を聞きながら開催できるはずでした。その日は、あいにくの雨で、やむなく雨天バージョンに切り替えます。ここからが、教職員の腕の見せどころでした。すぐさま予定変更。来賓の皆様を速やかに体育館へご案内し、記念式典です。静かな雰囲気で行われました。

後半は、エキジビションです。ゲストの浅越しのぶさん（1997～2006 プロテニスプレイヤー、現在はテレビ解説や後進の育成でご活躍）を中心として、ダブルスのミニゲームが何試合か行なわれました。たちまち歓声と笑いの渦です。その後、浅越さんのお声かけで、見学に来ていた小学生姉妹にも飛び入り参加してもらい、ミニゲームが続きました。小学生の上手さに観衆は大喜び。生徒の中からは、「感動した！」との声も聞かれました。

この日は雨模様でしたが、まさに生徒たちや教職員の心には「太陽」があったと思います。そして、何ともすがすがしい気持ちで、イベントが終了しました。

ご参加くださったすべての方々に「ありがとうございました。」と申し上げて、この稿を閉じさせていただきます。

